

高梁川流域の洪水と治水

幕末の大洪水

今年、五月の末ごろから梅雨の雨が降り続いて六月三日の夜十時ごろ、

粒浦付近では川上の安江と四十瀬の堤防が決壊して、水があふれ出したと見るまに水嵩が増して、あつというまに床の上まで水が押し寄せ、低いところでは家の軒端までも濁水につかる有様となった。

なにしろ夜中のことであるので、女子供たちは逃げるいとまもなく、ただ、「助けて……助けて……」と泣叫ぶ声が暗闇に聞えるが、どうしてやることも出来ず、あわれとも悲しいともただおろおろとするばかりである。

翌四日の昼ごろまで、水嵩高く濁流がはげしく押し寄せていたが、夕方ごろにはやっと濁流の勢いも弱まり、その後、日数がたつにつれて、決壊した堤防も応急の修理も出来て、一息つい

たかにみえた。

ところが六月二十日ごろになって、また、夕立がはげしく降って、応急修理の土手もまた破れて洪水となり、再び水底となってしまった。いつまでこんな状況が続くのかと、嘆き悲んでもどうすることも出来ない。

一週間ほど後には、水も引いて田の表面もやっと顔を見せるようになったが、田植えを終ったばかりの田には、植えたはずの苗は一本残らず押し流されてしまつて、一面のがれきの原と化してしまつてゐる。

蓄えの米や雑穀をはじめ畑作物はもちろん、家具や衣類などもすっかり泥水につかつたり、または流されて無一物になつてしまつた人々も多かつた。

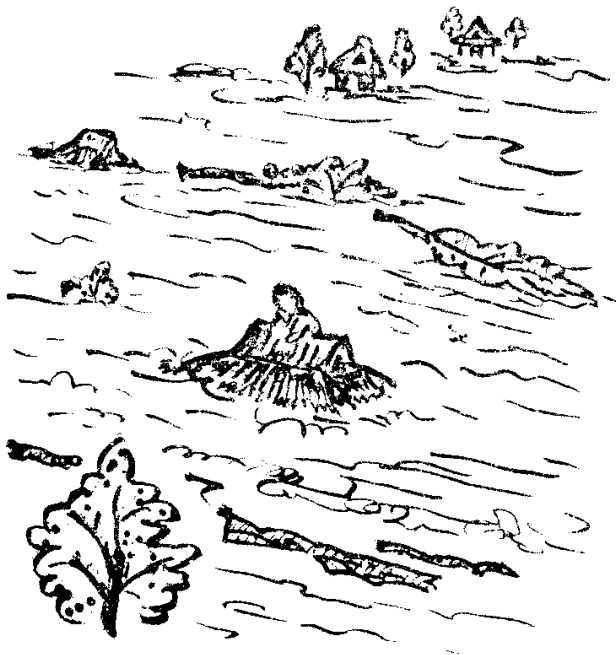
嘉永三年（一八五〇）夏、長雨により東大川の堤防決壊によつて大洪水になつた時、当時の粒浦の住人小川真澄の書き残した

「呉竹」という記録文をもとに現代語に書き直したものである。

また記録によると浸水期間は六月二日から二十七日まで二十五日間、浸水範囲は五十一カ村に及び、浸水にもなつて土砂の流れこんだ田畑は六百九十一町余（約六八五ヘクタール）であつたといわれている。

※小川真澄……寛政八年（一七九六）～嘉永七年（一八五〇）

児島郡粒浦新田村の豪農の子として生まれ、幕末の歌人・風流人として世に知られ、常に諸国が若が家（満ちて）だといわれる



明治の大洪水

明治二十六年（一八九三）
旧曆九月三日（新曆十月一日）、台風にもなう大

暴風雨が襲来し、増水した高梁川の水はみるまに堤防をこして溢れ出してきた。

このころの堤防は貧弱な土手の上にところどころ竹やぶのあるもので、洪水には弱いものでした。

神在村しんざいむら下原しもはらの土手が切れ、川下の川辺の町並みはまたたくまに濁流におそわれた。

川辺の人たちは二階建ての家や本陣宿に逃げこんだということですが、二階へ逃げた人たちは助かったといいますが、一階にいた人たちは増水した濁流にあつたというまにのみこまれて、押し流されてしまったということです。

低いところでは平屋の屋根の先が少し見えるほどの水嵩であつたといえます。

このとき、本陣の近くに住む十七才の友三郎も必死でわが家のわら屋根の上に逃げたが、気

が付いた時には水に浮んだ屋根の上であつた。
水に浮いたわら屋根は激流に押流されながら、
いつしか水島灘を漂流して塩飽本島にたどりつ
き、からくも一生を得ることが出来た。

同じようにわら屋根に乗って流されたいくつ
かは、山陽鉄道の鉄橋橋脚に激突して碎け散つ
て、濁流の渦にのみこまれたものもあつたとい
われている。

また船穂では、一の口水門及び又串^{またじ}の堤防が
決壊し、勢にのつた濁流は遠く金光の八重^{やえ}から
占見^{うらみ}まで流れこんで、玉島平野は一週間にわた
つて浸水したといひます。

又串の土手が切れたとき、濁流は家の床上三
米までも浸水し、激流が押流して運んできた大
きな岩が三十余りも流れこんで、今でも点々と
水田の中に残つていたりともいわれる。

このとき、女中をしていた十九才の満は家が
崩壊する寸前に、とつさに意を決して濁流にと

びこんだ。

そして流木にすがつて濁流にもまれながら、
玉島港町まで流れこんで九死に一生を得たとい
う。

さらに東大川では、中島及び古水江の堤防が
切れて河内地方はもちろんのこと、連島の全域
までも濁水に洗われることとなつた。

岡山県内の三大河川が氾濫して大洪水と
なり、十日余りも水没していた。
流失破損家屋は県下で一万三千戸、死者
が四百二十三名であつたという。
さらに翌二十七年まで赤痢が大流行し、
患者総数一万二千七百余、死者は三千
九百余人にのぼつた。

前年の二十五年七月にも暴風雨による大
洪水があり、さらに引続いて二十七年五
月にも再三にわたつて大洪水にみまわれ
た。

高梁川流域では浸水期間一週間、死者十
七人、流失家屋七百五十四戸、半潰家屋
二百六十五戸、浸水家屋五千三百戸余と
いう被害であつたと伝えてゐる。

水害の歴史

江戸時代初期(十七世紀前
半)から明治時代末(十九
世紀末)までの約二百八十
年間にわたつて、いろいろな記録をたぐると岡
山県下では少なくとも数十回にも及ぶ洪水の被
害に悩まされてゐることがわかる。

高梁川流域だけでもおよそ三十回に及ぶ水害
……およそ十年に一回の割合で人々は洪水との
戦いに明け暮れたともいえる。

大きな被害を出した主な洪水を拾い出すと下
の表のようになる。

年代(西暦)	水害のあらまし
延宝元年五月 (1673)	12~14日大雨 西大川破堤 家屋流失199戸 損傷家屋381戸 19日再度大雨 東大川八王寺破堤、西大川船穂破堤 洪水被害甚大
元禄十五年七月 (1702) 八月	28日大風大雨 備前・備中・美作一円洪水 とりわけ津山地方被害甚大 29~30日再度大雨洪水 平常の水位より1丈7尺(約5.2m)水嵩増す
享保六年八月 (1721)	4~10日にかけて大雨 西大川西原破堤、東大川酒津破堤 家屋流失280戸 損傷家屋900戸 死者43人 *美作地方も大風洪水 さらに享保十六年にも洪水
寛政元年六月 (1789)	17~18日大雨により 諸河川氾濫 東大川天神破堤、西大川西原、巻倒及び船穂中新田破堤 玉島・長尾・船穂 被害甚大 通町・土手町の町屋流失多数
嘉永三年六月 (1850)	3日 常盤村・清音村でそれぞれ破堤、洪水により被害甚大 東大川安江及び四十瀬破堤 洪水 浸水25日間 被害甚大
明治十七年八月 (1884)	25日 台風の通過にともない県下各地に大津波発生 県下の死者655人 児島郡福田新田の被害甚大 流失家屋890戸 死者546人(福田千人塚供養塔建立) 浅口郡 流失家屋807戸 死者95人 田畑損失871ha 船舶被害359隻
明治二十五年七月 (1892)	23日 暴風雨にともなう大洪水 県下三大河川氾濫 死者74人 流失家屋5500余戸
明治二十六年十月 (1893)	台風にともなう大雨大洪水 県下三大河川氾濫 死者423人 流失家屋12920戸 翌27年まで赤痢大流行患者12700人 死者3900余人 *翌27年5月再度大雨に 高梁川流域の被害額 数百万円(当時の倉敷町予算2千円) の大洪水あり

高梁川の改修工事

高梁川は江戸時代から明治時代に
かけては、都窪郡

清音村古地付^{こち}近で酒津山によって東西二つの流れに分けられていた。

そして高梁川が長い年月にわたって上流から運んできた土砂を下流に堆積させながら、河口をぐんぐん南下させていくとともに、流れの両側に自然堤防を作ってきた。

江戸時代初めごろから、この自然堤防の外側に広がる干潟の干拓に目をつけた人々は、自然堤防を利用しては、三百年にわたって漸次潮留め堤防として整備築堤してきた。

しかし当時の土木技術では、規模の極めて貧弱な堤防であった。たようである。

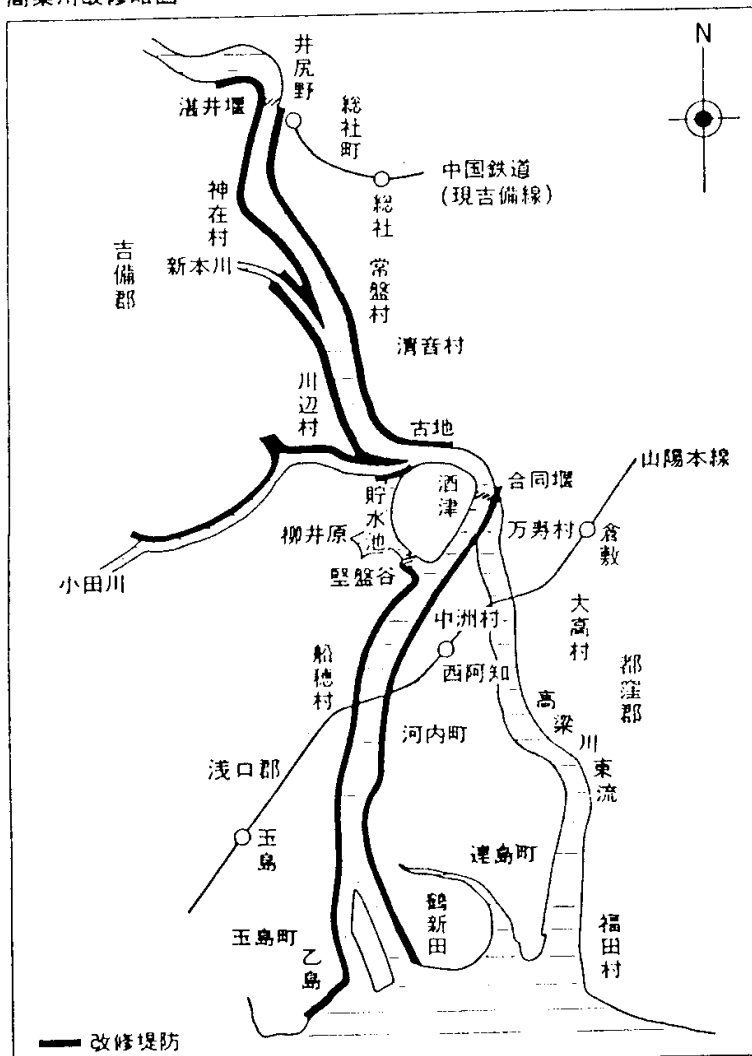
さらに江戸時代以前から中国山地で隆盛を極めていた備中鉄生産のための「かんな流し」による砂鉄の採取が、大量の土砂を高梁川に放流させ、下流で堆積して川底を浅くし、洪水を起

こさせる原因ともなっていた。

明治二十五、七、九年にかけての高梁川下流域の大洪水にもなう災害の中で、地元はもちろんのこと、県議会でも大きな問題となり、高梁川下流の大規模改修工事を要望する声が強くなり、国への陳情などの猛運動の結果、明治三十九年帝国議会で決議され、翌四十年から内務省の直轄工事として着手されることとなった。

そして実に十九年という長い歳月をかけて、現在にみる巨大な堤防が完成したのである。

高梁川改修略図



改修工事の概要

(1) 規模

① 堤防を築く

長さ { 東岸約21km (総社市^{たたい}湛井 ~ 倉敷市連島町^{にしおがき}西岡崎)
西岸約23km (総社市^{ごうけいはたけし}豪溪秦橋 ~ 倉敷市玉島^{たましま}乙島高崎)
幅 馬踏^{うまふみ}約9m 堤脚約53m
高さ 約9m (設計に当って明治25~6年の洪水時の水位よりも
さらに1m高くした)

※ 川幅……当時としては思い切った広さにした

湛井付近 400m 古地付近 509m
酒津付近 320m (一番狭いところ) 水江付近 436m
上成付近 600m 河口 1200m

② 東西二本の流れを一本にする

- 西川を柳井原の上手で締切る。 小田川との合流点以下は東川に流し、酒津で東川を締切る。
- 酒津の下手に新しい川筋を開設し、水江で西川に合流させる。
- 酒津から下流の東高梁川は廢川地として利用を考える。

③ 柳井原貯水池並びに酒津配水池及び合同取入れ樋門等を造設し農業用水の確保を図る。

(2) 経過

明治39年(1906)	岡山県の請願にもとづき帝国議会で議決
明治40年(1907)	改修工事の測量開始
明治44年(1911)	国費による改修工事 起工式
大正4年(1915)	東西高梁川の一本化案発表
大正5年(1916)	高梁川東西用水組合設立
大正14年(1925)	改修工事完了

(3) 工費等

工費総額 約800万円 (当初見積り予算500万円
10年計画で大正7年完成の予定)

土地買収面積 約500ha (5km²)
[早島町面積約8km²]

移転家屋 910戸 (3425棟) } 関係する地域
吉備・都窪・浅口・児島四郡
十四カ町村

労働人数 延300万人 (1日平均200人)

[人夫賃 馬1日当り 1~1.5円
人1日当り 25~90銭]

改修後の効果

昭和九年(一九三〇)九月室戸台風の襲来では、県下三大河川は出水大被害を起した。

しかし高梁川下流では、最高水位が明治の洪水時よりも一米以上も高い六・七米に達したが堤防はびくともせず大風水害に耐え、被害を最少限にいくとめたという。

(2) 農業用水等の確保と安定供給

江戸時代初めから新田開発にともなうて拡大する農地の用水をめぐっての水争いが、三百数十年にわたって絶えなかつた。

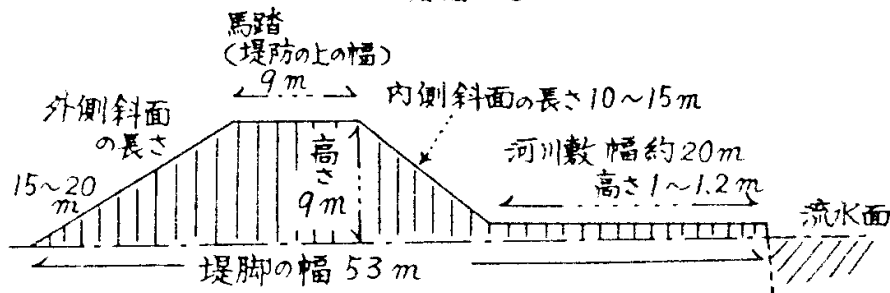
しかし、総社市井尻野の灌井堰や倉敷市酒津の合同堰及び酒津配水池の設置や用水路

(1) 治水上の安定を得た

こと

昭和九年(一九三〇)九

高梁川堤防断面模式図(霞橋付近)



の改良、東西用水組合の設立による管理運営などにより豊富な水が供給されるようになり、水争いの問題も解消された。

(3) 広大な廃川地の利用

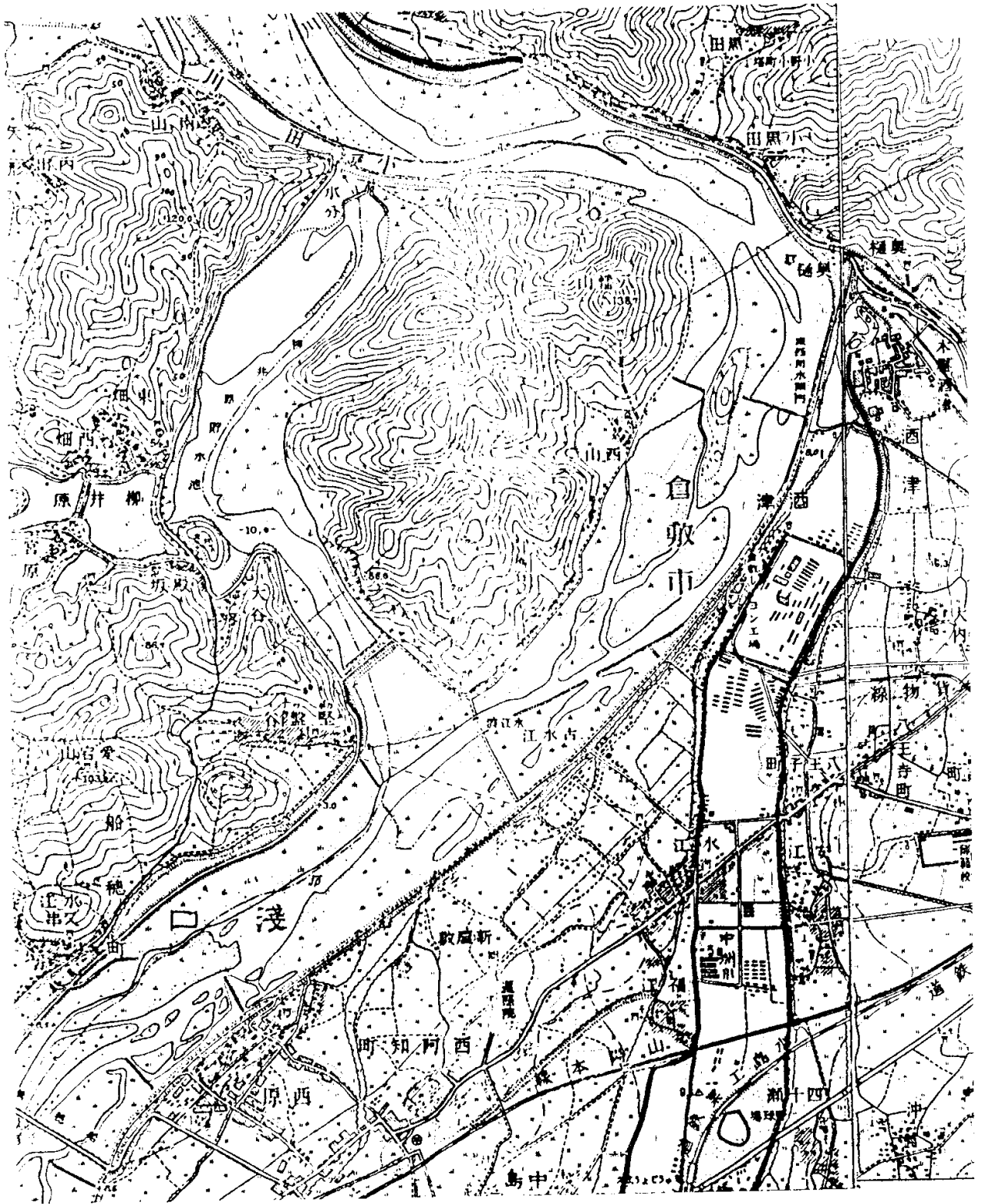
酒津から水島にかけての東高梁川の河川敷四百七十ヘクタールの土地が新しく誕生した。

この廃川地の新しい土地は、倉庫、酒津工場とその社宅、中洲小学校、倉敷野球場等の敷地に、そして中島付近から南は農地としての利用が展開され、酒津から水島までの約十二キロにわたって幹線水路(八間川)や道路も新設された。

そして昭和十八年(一九四三)水島に航空機製作所が建設され、次第に水島の市街地が形成されて、現在の水島臨海工業地帯の基盤ともなった。

(4) その他、東西高梁川にはさまれた河内地方や周辺地域の湿地が自然に改良されて、乾田となり農作物の収穫も増加することとなった。

〔昭和二十七年（一九五三）ごろの地図〕



(1) 奥樋付近から酒津にかけて、高さ8m余の堤防で東高梁川が締切られ、堤防はさらに西原付近まで延びて、西高梁川の東岸に接続して、高梁川の流れが大きく変わっているのがわかる。

そして、かつての中洲村北部の広々とした田が新しい川筋になったこともわかる。

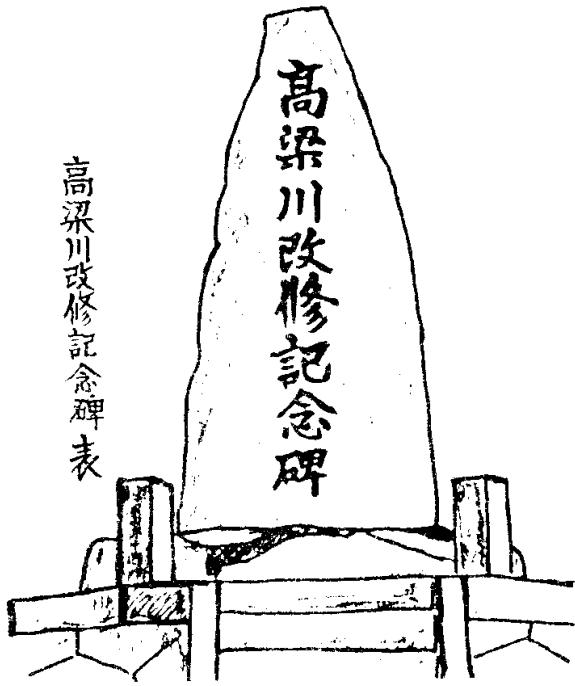
(2) 東高梁川の廢川地も帯状に南へ延びていることが地図でもはっきり見える。

また、鉄道も山陽鉄道時代よりも稍、南へ移されて敷設されて、古い軌道跡が福江付近で残っていることも地図で見られる。

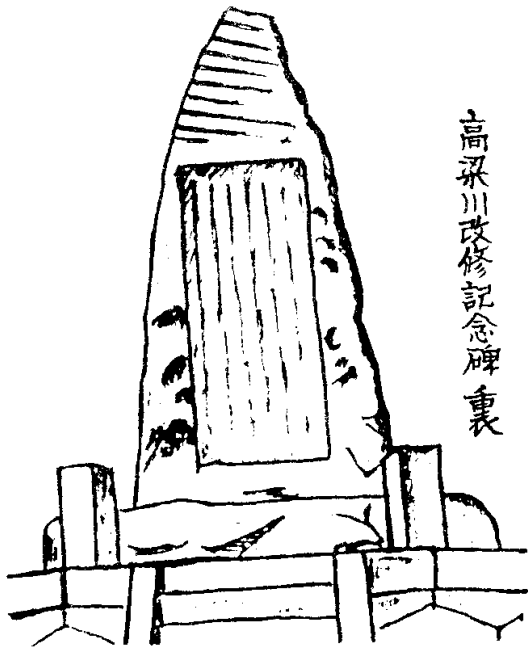
高梁川改修工事記念碑文

高梁川ハ岡山県下三大川ノ首位ニアリテ全国第一期改修二十ヶ川ノ一タリ、其灌漑区域頗ル広ク水利甚ダ大ナルモノアルト共ニ水害区域亦従ツテ広ク被害劇甚ヲ極メタリキ、即チ洪水ニ際シ堤防道路等ノ破壊、農作物其他ノ損耗筆舌ニ絶シ人畜ノ死傷住宅衛生上等ノ損害亦測知スベカラザルモノアリキ、是ニ於テ政府觀ル所アリ明治四十年改修ノ工ヲ起シ、工費七百九十余万円ヲ計上シテ本省直轄工事トシ左岸湛井ヨリ右岸秦村ヨリ下流全部ノ改修ヲナスコト、ナレリ爾來施工ニ年ヲ閱スルコト十有八其間官民ノ措置宜シキヲ得、今將ニ功ヲ竣ヘントスルニ至ル、恐ラクハ將來再ビ慘害ヲ蒙ル憂ナカルベク永ク沿岸一帯ノ福利ヲ増進セン、茲ニ大正十四年四月竣工ヲ見ルニ當リ直接之ガ惠沢ニ浴スベキ吉備、都窪、浅口、児島四郡四十五箇町村相謀リ此ノ碑ヲ建設シ以テ永遠ノ記念トス

大正十四年四月



高梁川改修記念碑表



高梁川改修記念碑裏

